巻頭特集

萬古焼の源流をたどる

沼波弄山と華麗な色絵の古萬古

桑名市博物館では昨年6月、萬古焼の創始者・沼波弄山の生誕300年記念展「古萬古とそれを継ぐ者」が開催された。華やかで斬新な図柄のやきものに魅了された来館者も多くいたという。今や北勢地域の地場産業として栄える萬古焼の始まりを紹介する。

茶の趣味が高じて作陶に手を染める

萬古焼の歴史は沼波弄山が元文年間（1736〜1741）、桑名藩領の小向村（現・朝日町小向）で窯を開いたことに始まる。弄山は作品の価値が変わらず、末永く残ることを願って、自身の作品に「萬古」または「萬古不易」の印章を捺したため、萬古焼と呼ばれるようになった。

「全国で有名なやきものは、伊万里焼、有田焼、萩焼のように、生産地の名が付けられているのがほとんどですが、萬古焼はそうではなく、とても珍しいと思います」と、桑名市博物館学芸員の鈴木亜季さんは指摘する。

桑名市博物館学芸員
鈴木亜季さん

弄山は享保3（1718）年に生まれた。諱を重長といい、通称は五左衛門。生家の沼波家は桑名の船馬町に店を構えていた。陶器を扱い、江戸の今川橋詰にも店を持つほどの豪商だった。

幼少より茶道を嗜み、茶陶にも親しんできた弄山は、長じて邸宅内に窯を設け、自ら陶芸を始める。当初は楽焼を模して、茶道具を作るという趣味程度だったらしい。それが小向村の別邸に窯を築き、高火度の本格的な作陶に乗り出す。尾形乾山（尾形光琳の弟で京焼の陶工）の弟子、猪八が著したとされる陶法伝書『陶器密法書』の写本を入手したことが背景にあったようだ。

異国情緒あふれる独自の作風が人気に

京焼の技法を用いながら、弄山は唐津、志野、織部などの茶陶の写しや色絵の陶器を作っていたが、次第に硬彩釉による独特の赤絵を特徴としていく。意匠としてはインド起源の更紗文様の赤絵を地文とし、象や獅子、オランダ文字など、異国情緒あふれる題材が描かれた。

「当時、将軍徳川吉宗の施策で、ヨーロッパの書物の輸入禁止が緩和されました。海外の文化に触れる機会が増え、弄山も影響を受けたのでしょう。オランダの風物や中国の吉祥文様、人物などを図案化して、作品に取り入れたのです」と鈴木さん。

異国趣味の斬新な図柄に加え、盛盞瓶や雪輪鉢などの作品は、精巧で優雅な形状も注目を集めた。弄山の萬古焼は江戸でも好評を博し、将軍の御数寄屋道具御用命を受けた。

そんな事情から宝暦年間（1751〜1764）、沼波家の別荘があった江戸向島小梅に新たに窯を開き、弄山も江戸に赴く。『新編武蔵風土記稿』には「桑名より土を運送せしめ」とあり、江戸の窯でも小向の名谷山の土を使っていたことがうかがえる。

「江戸で焼かれた萬古を江戸萬古、小梅萬古などと呼びます。並行して桑名（小向）でも萬古焼は作られていましたが、両者を区別するのは困難とされています」と鈴木さんは話す。

江戸で弄山が没す創始一代きりで廃絶

自ら作陶していた若い頃とは違い、萬古焼の名が世に知られるにつれ、弄山は窯を運営する窯元的立場となり、実際の製陶作業は陶工たちが担っていたという。ただ、世間から高く評価された異国趣味は弄山の意向に違いなく、作品に反映されていた。

前述の『新編武蔵風土記稿』には「安永天明の頃は最著名なるをもて」とある。弄山は安永6（1777）年に没しており、最晩年から死後にかけて、江戸萬古は最盛期を迎えていたようだ。

同書には、将軍徳川家治が羅漢寺境内で館次郎の作陶の様子を上覧したことが記されている。館次郎とは弄山の弟子である。

弄山の死後しばらくは、妻の八百や番頭の安達新兵衛が経営を取り仕切っていたが、弄山の息子が製陶に興味を示さず、寛政（1789〜1801）の末頃、新兵衛が没すると窯は閉ざされ、萬古焼は廃れてしまう。

天保年間（1830〜1844）に入り、桑名の古物商、森有節によって萬古焼（有節萬古）が再興される。現在では弄山没後に再興された萬古焼と区別するため、弄山が携わった時期の作品を特に「古萬古」と称している。その後、萬古焼に刺激を受けた「桑名萬古」「射和萬古」「阿漕焼」など、萬古焼の流れをくむ窯が現れ、「四日市萬古」へと受け継がれていく。

沼波弄山翁画讃（写）※部分
（水谷桑丘 画／岩田隆俊 書）

弄山の一周忌に描かれた画像の写しが光徳寺に伝来していたが、戦災で焼失。再び写しとして作られた

左）西船馬町にある伝「沼波弄山生誕地」の碑　右）沼波弄山が眠る墓所。光徳寺本堂の横にあり、「沼波弄山墓付沼波家墓所」として三重県指定文化財となっている

現存している古萬古の作品

赤絵菊花文輪花鉢

口縁に規則的に切り込み（窪み）を入れ、花弁を開いた花に見立てている。弄山の作品にはこのような輪花が多く、雪の結晶に見立てた雪輪鉢なども有名だ。右は鉢の底裏に捺された「萬古」の印

赤絵獅子文燭台（桑名市指定文化財）

古萬古独特の赤絵を主釉とした燭台で、緑釉で獅子を描いている。裾には幸福と富と長寿を意味する「福禄寿」の文字が見える

青釉人物文酒器

古萬古には独特の色を出した青釉の作品もある。中国の人物や山水、風俗などは、弄山が好んで用いた図柄だ

オランダ写手焙（桑名市指定文化財）

手焙（てあぶり）とは茶席で使われた、手を温める小さな火鉢のこと。青白釉を基調に、主として黄釉でオランダ風の図柄を描いている

※掲載作品はいずれも桑名市博物館蔵　文／長屋整徳　写真／桑名市博物館提供・青野穂波　デザイン／chica